Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

へ14
4424
7

國立臺灣大學圖書館藏

特
へ14
4424
7

見て

初見

怒濤碎けて

自己中心明治文壇史 一〇十

江見水蔭

片瀬の浪居

明治三十九年の春の下山

江の嶋道一の島屋、片瀬村の役場前を貸別荘が有つた。これは江の嶋の勝地を占領して別荘を植物温室を建築してみる英人コッ

キング（前號ゼームスとゝんのは誤り）の所有で、英洋畜産官田某氏の名義になってゐる。英所を一年五十五円の契約で借りる事ゝした。

家は片瀬川を臨み高地に在って小漠の觀有る砂上ヶ原を越して鳥沼辻堂、茅ヶ崎の海岸を見渡し、相模灘の一部から、烏帽子岩、大磯の裏手山の上あたりを富士を見遠望し得て風景正に絶佳ふので有った。

八畳、六畳、四畳半、二畳、そして某所及び男廚が附属してゐて、建坪地坪廣かった。

此所へ大澤天仙、羽衣鉦治の二人を連れて、

見

東京牛込北町[illegible]移り住んだ。母は[illegible]軍醫某氏の嫁して[illegible]る従妹の家に寄合[illegible]居[illegible]と従ふった。

新田静男、田山花袋の二人引越しの者は泊りに来てゐた。若い者ゝ二人で男世帯の自炊振りは、誰が主人やら分らぬと近所では秘色する若々しいふう。

文士の田園生活として（其實農村生活）当時問題とされて讀賣新聞の雜報に、堺氏山が得意の文章で江見水蔭文陣を片瀬に移

最初の試みふうで

すゝむといふ題下に、紅枝の筆を取り。『太陽』の文藝時評欄に、高山樗牛の筆で『コナンドイル』曰はずや。文士は田園を愛す。余は今田園を生活を営む。而して批評家は多く都市を住とす。水蔭果して コナンドイルの意氣有りや。と云つて意味で批評を試みん。

又『護國』紙上で当時評判の好かつた狂詩欄で、莊攝津といふ匿名（野口寧齋氏）で左の如く宣せり。

水蔭隱家近腸刻。日破濱風吹蒼髮。

見

べんけいのひろせきあるひは　ようちゅうのぼうりきさがくばつせず

年賦業績或稱慮。日蓮法力長不沒。

しゅうのびるにいすばふいちろーん　べんてんのいはやさみつきさんず。

對自然茅亡不平。新天岩屋波浸月。

No.

片瀬を移る前は、高利貸森田某に、借かる二十円未滿の借財の上で、忽ち利子が積つて元利の高は膨れ出しを食つてゐた。

裁判所は と成り、呼

これは当人が出頭するより、代人が行つて、即能る法定の利子で計算して返済すれば、高利貸を貪り得だして、原告は不利益だと、新田静湾が何処かで聞いて来たので、片瀬移住のドサクサ紛れに、八雲の叔父水原の保證し

てゐる江見家の財産中から引出して、それを
実行する事に成つた。
が、その代人に適任者が無かつたので、田山
花袋を煩はす事にした。花袋は寧ろ自分の為る厭ふ
べき徒延に立つて、高利貸に金を叩きつけて
来て呉れたので有つた。この事はあんなに自分
は済まないと思つてゐる。
この時代、片瀬への交通は電車が無い
ので、藤澤驛から一里弱を俥に乗るか、山
本橋まで徒歩で、それから乗合船で片瀬川を

見人

下るので有つた。
その川船は底が浅く平な構造で、約三間位の
長さなので、無理に詰めれば十四五人は載せ
られるので有つた。
この川船を自分は一隻、近所の船大工に注
文して製作さした。（三十円未満で有つた。）こ
の川船に、大澤、羽衣の二生を載せて、川から
海へも出た。又川を溯つて途中に乗捨て、藤
澤の町に遊んで、夜遅く帰りなどした。
留守は明放しなので、却て近所の者が心

配して戸締りをしてゞると云ふ事が有つた。

羽太は未だ少年で、何んする事も無く、大澤が赤い襷を掛けて竈の下を吹竹突いて炊ぐ。

羽太は又大澤が意地が悪いと憤慨して、始終喧嘩が絶えなかつた。それで鈴木家右衛門らしい老人へ（房州から流れ降りて来てゐる者）を、賄方として傭入れて、食事万端を受負はす事にした。

羽太鉄治追放

明治二十九年の夏の上

内幕を格つて閉ふく中央新聞にハガキ一枚で、出社する度ごとに云ふ意味の退社を示す命令が来た。これは豫期してゐた事ぶりで

A 10 20 青山三河屋紙店製

有つたが、多少悲哀を感ぜずはゐられなかつた。（中央すは自分の後へ直ぐ川上眉山を入社さして、小説を書かせる事に成つたが、眉山は自分以上に怠けれので、間もなく断はられた。）

中央退社に就て尾崎が同情して呉れて、真田先生に相談して清貧の方へ入社と運んで呉れた。

一方さうした早速、自分としては四月が立つて、非常に嬉しかつた。但し月給三十円で、丁度一年の間六ヶ月分の小説を受持ち、原稿だけ差出せば出社する必

見

ぬといふ條件ぶりで、その入社拂露として船

ちエ[illegible]といふのを連載する事に成つた。

この他は[illegible]

雪月花といふ雑誌に水鞠會といふ[illegible]

斷つて宅へ帰つて、[illegible]

建家を買得して、自然の親子の暮

んで頂き、少しづつ鎮静して書く。東京の

は友人や親戚が、チヨイ〳〵訪ねて来て呉れ

た。又金魚樓の息子の秋さんや、[illegible]

子で十代三（號・白水）といふのが、絶えず遊

これは朝倉盧山人（後の山田想南）及び岩田鳥山の編輯で有つた。

總名題の下に日報燈炉棚と別花守と片頼船の三紙分掛を掲げた。

敬愛を受け

びる事。戸瀬名物、雑●口饅頭を献じて、角屋
といふのもの頼まれて、大澤天仙が。
名物は甘いものあり雑ノ口
人の口まねをする[illegible]名の餡
といふ狂歌を作る[illegible]上包に用ゐるふ
ど、土地は大分親しみがまして来た。
其所へ、紅葉から今紙が来て、武中大擧し
て貴庵を訪問するといふ通告を接したので、
飯田準備を取り掛かる。
戸瀬の浪宅を訪て自分は、儿笑人の左治郎宅

を文字より、沙地浪宅と名づ、又蛇穴を
呼んだ。（後を怒濤庵と呼んだのが、今日まで
んでる。）
武中が大擧して来るといふのが、一番
大歓迎として、廣膳を接いて遣ることと考へた。
それは戦争後の凱旋行の折柄だから、萬
事それを学ばうと考へて、先づ歓迎旗を数旗
作製する事として、白の金巾を二反買求すべく、
鋏刀を以て藤陰は遣はれるので有る。
虜が金巾を

自分が已に歳で、雑云の歳を縁を有るので、

一文しか貰ってゐなかったので有った。
「二と一との数字が分らんやうな奴は駄目だ。出て行けッ」と自分は大喝した。
但し最少し複雑な事で間違ひも有ったのだが、金とか交換に就て自分は怒鳴った。甚だ他愛の無い事で、今日に於て考へると確かに常識では無いのであるが、其当時の自分は、直きに癇癪を起して怒鳴ったり、殴打したりした。（壮年時代の門生で自分に殴打されぬ者は殆ど無かった。）
それを大事が中間で取りなしする様な事は、

9 見

平常の犬猿の間だけに、少しも試みなかった。
羽太も亦短気なので、それでは出て行くと、直ぐと荷物を持って退庵した。
不断鎮静してゐる時は一倍は腹立っぽいから、怒った時は無茶を云ふが。それは気はしないで置いて呉れ。出て行けと云ったら、かうって出て行かぬだけの執着は持って居て呉れ。時が過ぎれば此方から謝罪するのだ」——然ういふ事を発表してゐるので有った。羽太はそれを忘れて去って了った。
（それが今日の医学博士と成る発奮の一因

○○○○で有つた。

早速自分は『船大工』の中に書きいれた。

10見

金色夜叉の話

『明治二十九年夏の下』

羽衣が去つたので其代りに呼んだのが伊藤望賀で、これは新潟越後から自分を慕つて東上した冒険好きの少年で、中央新聞へ給仕に世話をしてやつたので有つた。

七月二日。紅葉、小波、思案、柳浪、及び鏡花、春葉、風葉の七人が来庵した。この記事は古き『文藝倶楽部』に『汕地浪宅に遊

ふ記と云て、石橋思案が寄稿してゐる。（紅葉
が大愚の名で、大分加筆して居り。小説が又小
説の名で、狂言を挿入して、餘程面白い物だ。）自
分も亦、沙地浪宅拾ひの記と云ふのを書
いたので、此所は略するが、此時分この如き
挿話の有つたのは、是非書き遺すべきで、そ
れは「金色夜叉」のモデル問題だ。

この時自分は「古陽」を寄せるツモリで「紅葉
の小舟」といふ短篇を完成してゐた。それと
原稿のまゝ紅葉に渡す示した。渡り性の紅葉は自

A 10 20 春山 三河屋紙店製

見 11

分の処景ふ用字は、一々朱筆を入れふどゝて読
んでゐるが、待ては酷く興奮して。

「おい〳〵、巌谷、来てゐろ。この小説は
失恋の主人公よ、友達が母情して、今を貧し
て娘を掠奪して、無を奉して二人を海の向う
へ落してゐるんだ。君は、ラブが報いれか
ふッて、直ぐ諦めッろッて平氣でゐるんか
ドイカンよ。少しも熱しないんだもの。奪い
ぬ。君が本氣で成れア、友達は皆今
を捨てゝ待つてゐるんだ。そんな意味の事

を云ひぱなし。

「僕は樂天家だから。」と小陽は問題にしないか。

「おゝ、アナクレオン！アナクレオン！」

と男達はどッかへ行ッた。これを丈吉時、アナクレオンの樂天觀が澤さんを「右陽」に出てみるので、少し樂天的の事を云ふと、直ぐアナクレオンと冷やかすが、既行てみる。

それから紅葉は、一流の恋愛觀を說き、更る近讀の米国女流作家某の「ホワイト、リ、イ」

といふ小說の概を話した。それは若者が失恋する。相手の女は財産家の方へ傾いて、結婚する。その婚禮のチャーチの鐘の音の聽えなくなるまで北へ行くといふ筋で有る。

「これをヒントを得て、近々讀賣へ小說を書くよ。」と紅葉は云ふて話を結んだが、

この翌年の一月から、「讀賣」へ出し始めたのが「金色夜叉」で、主人公間貫一は、小波といふ噂がズッと後年迄殘つてゐるが、それは決して小陽一人がモデルでなく、主人公の

仔見

世界代りは、多く集合写真的な幾人かを寄せて一人物を拵へ上げるので、貫一の一部は小説の編入さるべき知れないけれど、大体は著者自身の熱情が躍動してゐるので、又高利貸と成つたのは、豫備門時代の学友葉が中途で退学して、アイスの年代は成つてゐるのを採つたので、高利貸―高利借の問題は就ては、純中世田村池、中村雪後、川上眉山、及び自分、ふどの若い經験を紅葉は熟知してゐて、どんな事が有つても、アイスだけは借りるな。

と色彩の如く平常驚いてゐるんだ。

金色夜叉のモデルでは、お宮は、しろ、眉山唯継は、しろ、藤尾は、しろ、皆集合モデルで、こうして、人の直写では、ない事を、自分は能く知つてゐるが、それは、今月発表する、分析は、まだ早くの訪問で省く。

裸体

明治三十九年の初秋

片頼の生活は、自分の二重性格は能く現はれてゐる。ルネ式の半可通遊戯の他は、水

海傳式の豪傑振りを発揮して喜んでゐる。
外へ出るのも誰でも跣足で家へ帰つても洗
ひもせず土足で上つてゐる。それは水地の為
も然程足の裏が穢れぬ結果でも有つたが。共
ばり雖も中は分論戸棚の中まで破れるけで有
つた。

兎跳をすると稱して着衣の儘水泳するふん
どは何んでも無かつた。彼の無い自分の浴
衣は天仙も着れば乞食も着れ。それで
紙中ち學校就れ待つは、唐山の圓墓で貰つ

14見

た乾麩餅の掬ひのみが自分の物。

時、碧沼の東屋の若者人、小川氏等から
招待されたので、初めて其所を訪問すると成つたが
着て行く眞面目な花類が無く、その歌舞
伎の、ハデな大形浴の浴衣を着て、紙屋を供
して行く事すつた。これは川を海へ廻
船頭の拾はれそして、それで島田の引地川へ無理やり
花類が無いとは思はれまいと、内緒りの二
人で棹を突張つて海へ出た。

碧海近くまで行くと不幸にして暗礁の為に船が沈没して、二人は危く溺死しそうになれが、如何やら断崖を泳いで上陸した。之で一枚の浴衣を濡茶々々で、遂に二人とも裸体で行かねばならぬ。

夢が、其褌が乾いてゐるので、それを被中藪田の為る新調した帷子を代用してゐるので

藪田の妻は「此褌で故郷へ行かれる」と言ふ。

有る。

初めて訪ねる家へ、這んな行掛りの裸体

の傷痍人んだので、東京の者は皆驚いてゐる。

「えは決して奇行を敢てして世を眩ぶれのではなく、高尚を得るかゐので、片瀬の男子世帯を語る代表的傑作といふ可きで有る。」

藪田の帷子を粉末樹立さしてゐるが、後で間くと、海水浴用の古褌を利用したのだといふ。

明せず「逆命が逆命したので有る。」

梁山泊の秋

明治二十九年の晩秋

江の島遊ぶのを兼ねて入替りに立替り、種々の人が訪ひ来るので有るが、牛込以来、田山より古く準門下として来てゐる竹貫佳水が故少年世界主筆、本名直人。男子世帯の中を多くの来り加はる。

竹貫は陸軍測量部員として、日清戦争当時、滿洲の野を活躍し、牛荘市街戦の前後、窮から窮の本営近く潜行して、市街の見取地図を急製した強熱者の一人で、戦後は朝鮮の方へ廻はされて、其所でも測量の従事中、同行

16見

僚二人が不逞鮮人に惨殺されたといふ。それで其追善の意味で、小さな墓碑を求めて、それを携へて自分の浪花の寄り投じ、当分静養すると云ふので有った。

曾て女房持ちを趣味とせず、竹貫の少年数学上の智識を注入され。其他少年部の繁雑事務を要する雑事は就ては同人の材料を得てゐるので有った。

十一月の初旬、妻が東京に帰り、男子世帯の中は唯二人かけられ。其後老人を断って、隣家の車夫の小娘を傭入れた。け

れど乱暴な事は少しもしないこと。

龍口寺へ弾正を入れてある。壮士を乱暴者

しかり。昨頃お化花火を賞して来て、近所の者を

驚かしたり。甚だしく村の平和を破ってゐる。

磯部水（清）が深山に加ふるの式

頃で有る。一番年少者ふので、皆な能く苛

められて泣いてゐる。

薄瀬乱水とくふの暫く寓した。

櫃は常に空か。（磯、行貫は食料を

入れてゐる。）差配人で中丸とくふ家から米塩

を取寄せてゐるが、不拂ひの為突然入れふ

く成った。

之を聴いて奮慨したのが南家の主人（そそ代）

今は世を去る人だから、米は何百俵でも入

れると義侠心を出して呉れた。（片背

後は照吉の酒造家某が隠れてゐるとくふ

事を最近に成て聞いた。）

（俺の音から）

（食頭家）

記載したのは諧謔で、一枚五拾銭で有った。

『断腸亭十種』『世界之日本』（行基思三郎）

『踏切の番人』『智徳会雑誌』（神戸

三村の『道楽雑誌』

『護寶』の『時代小説』ととりふ注文が来た。

それは其当時『東京日日』で塚原蕪柿園の物

が当って、新聞社会の問題を成てゐるもので

有った。

夢が、自分は何んだか莫迦をするのがイヤ

ふので、時代小説では有るが、詩想豊かな美

文るまとゝふ野心をいて『水茎姫』とゝふの

を書きました。巣く社の注文脱れふので、甚だ

評判が悪かった中で、一日、内藤から上京

して、社を行った自分は、世良編輯局の一員で

有った土居春暁が、あんふ風に書かれては

同情して呉れるのが、何よりも嬉しかった。

雪中行一枚

『明治三十九年の冬』

行基住水は工学の智識を固んでゐれので、

架橋工事は紙での材料を提供して『葛城橋』くふうを十一月二十七日より起稿して、十二月五日は脱稿。紙数百枚。之を携へて上京して、年末の諸拂を完了する。つまりで、妻と共に藤澤駅まで出てゐた。生憎雪が降りだしたので有つた。

[redacted]

[redacted]二人とも袷一枚で[redacted]のので、寒い[redacted]のでふるへ[redacted]が要くて耐まらぬかつたが、[redacted]の男子は[redacted]を待合せる[redacted]の男子として羽織や袴を着ふい者はふく。又ショールや（大きな膝掛のやうな）[redacted]

[redacted]雪コート（斬く流行し始めた）を着ふいる者は無いので有つた。冬物は大概素[redacted]貧乏で[redacted]貧を入れてゐるのが、内幕の海岸生活では常の暖かでもあり、又見得も要せぬので、つひウカ〳〵と袷の儘でゐるので有つた。自分ですらも全く赤面しるのだから、家内もさこそと察せずはゐられぬ。

年末の稼ぎとしては他に『国民之友』の新年は録として『水蛍雪』を十日に脱稿した。

（此時代は、國民文友の新年附録の權威も、漸く衰へて来てゐた。）少年世界は木佐貫霜川氏の冒險を志す小說を連載し、讀賣の僅少なる稿料を得て、讀賣では新年から、紅葉の金色夜叉を掲載する筈で、例の繪ビラの立看板式廣告を市内治く出す筈で、それも添えて廣告するから、自分の名前も出す筈で、不取敢短篇百種と通告して置くれ。

（漸く 凌ぎを附けた。）

すると明治三十九年は自分は取つて代りの小説を書く筆も一年で有つた。（著作上の最後は牧入記録は附け落しが有るので、明細な分らぬが、前年と大差は無かつたやうだ。）

A 1020 青山三興産紙店製

20見

眉山事り扱ず

（明治三十年の初春）

明治三十年正月元旦、曉起。家内中で海岸へ初日の出を拝しに行つた。唯ちらばつて、旧歴に従ふ漁村の初春は、甚だ寂しく、ますで有つた。

二日目の朝は家内中安堵坊主となると、表を車引きとトボ〳〵と叩く者が有つた。自分は縁側

と腹の中で喜んだので有った。こんな所へ
[illegible]逸話が多く有ったのだ。藩侯の細絲
問屋、梅荘右衛門とくふ人は、多く知って居る。
この人が旧冬銘酒を一瓶、使を遣して
貰ったので有った。妻が日の長く成るまで
一家挙って
してゐますで、いくぶたを叩いても起きまぬか
った。使の者もノンキな奴で、門にへたば
瓶を置いて行ってしまったので有った。然う
とは知らず其後で起出て見ると、意外にも酒が
届いてゐたので、能く通行者を捕へて行った

A 1020 青山三河屋紙店製

21見

ところ、[illegible]の時代を歌せ
右平[illegible]詩[illegible]ずるなるふ
れたので。
[illegible]が有った。
[illegible]酒[illegible]と言いで
酒その物でなく酒を呑む人が来たので
自分が出て戸を明けて見ると
全く無地の羽
織り蓑笠を被り、草鞋脚半で其他は何一ッ
[illegible]背丈の高い
[illegible]川上眉山が、ニヱ―ッと立ってゐるので
有った。

早速草鞋を解いて、直ぐと酒を出した。

やア能く来た。

これは[illegible]い使[illegible]だね。

No.

眉山は会張真利る茶一められて、上留坂町の家を借り、軒時春陽堂の二階を借りを拵めてゐどるれ。そんで法事夏の社中方撃まるかはげ多く文学界の連中や、一葉女史ゐどと交際してゐる文学界の連中、一葉女史ゐどと交際してゐれので、第一自分が中央公論を出れ直後社の方では自分の文章を当て式る抱負を抱負まると成って、其の羽の矢が眉山を立てれ時る（松井白軒が侍者で）ノホンノ自分への義理ぶんか考へず、まるそれを踏ドた程の頗る狡ぶ間る成って、みれ変る、彼の泥沼る就ては自分は何を知らちかつれのだ。

見

一身の秘密る就ては決して友人る打明けれ事の無い眉山ふりで、毒くは何を言ふ為が世間が人生日る非ありと云つれ事ふ調べで無き東の放浪の旅をつづける目的の下る昨冬留士の砂野を一周し、一旦東京る帰り、去晩日の夜月は長谷川二葉亭と共る目黒の茶屋で飲み明かして、それで朝早く自分の住居を訪れれ。そんから三浦半島を巡遊する計画を立て、先づ抵当しる藤澤の宿き泊る一泊で有つれ。

来て見ると若い文士ゴロ〳〵してゐる。
五人ぢ帰りとて行当りバッタリの自然自然を俗
そしてゐる外ない眉山すっかり氣を入れて
うして当分置いて貰ふよ」といふ事に成つ
たので有つた（この当分といふのが半歳以上
なんだ）――中途で三伸半峠を一周して
ちゆが有名ふ ふとさろ日記と成って『漂泊』
は現はれた（後の事）

『韻寫』『探検』

『明治三十年の春から夏へ』

詩人は上の詩人
忘れ者の如へ忘れ者が来り加はつたのが
ふ、つた『漂泊』の『紀行百種』は休筆時で
あつた。眉山その他と江の島や鎌沼へ出掛
出掛けたり、片瀬川の舟遊、弧上ケ原（其頃
は原始的な原で有つた）の遊。
『戦』（金銭は貴しく）そのうち花合
日を暮ふ―れ（片瀬は別荘の有る所は僅少で革命が石橋恵吉の
親父、秦泊根荒助（故豊臣務大臣）其他高崎、尺ばる遊ぎ
ぶが有る。）
酒は眉山が来てから日は一升では足りず
成ふ。是は眉山の方がズッと上で有つて、我
輩が寝てゐる眉山は猫で其の所へ酒を探し

家は一軒ぶく、
防風林も防波堤も
何んすも無かつた。

は行く程で有つた。

一月中旬は眉山と自分とは、何と思つてか、箱根塔ノ沢の金太郎（そんな旅館つがあるんだ。）へ行つて泊まつた。（泊まつたとも。）其時から眉山が電報で文路男や側の馬場孤蝶と戸川秋骨とを呼んだ。自分は二子を見るのは初で有つた。

[illegible]

帰途は二子多摩川の渡船を立寄つて一二泊して行つた。

[illegible]で小舟で江の島を一周して龍宮の探検の話を聞いた。

二月十一日は岡田虎心が来たので、

A 1020 青山 豆腐新聞巻

見

此時には大仕掛で龍宮を探検する事を成つた。（龍宮とは普通人が奥之院（おくのいん）と入る雑司の池とは全然別の場所と有つて、先年までは海水が其奥まで浸入してゐた。ふり〳〵氣味の悪い[illegible]池で有つた。）この記事を早速読賣へ報告探検記として郵送した。

高が其時読賣では猫遊軒伯知の名を借りて其実藤野唐次郎が（従軍記者として名高かつた）軍人間を歩行して材料を調べ上げて日清戦争物語といふのを連

載して大好評で有つた。それは本文の番所
そして二號活字を挿入して、傍人目を
興味深く打つて景氣を添えてるたのだが、自分
の探檢記をちゃんと做て出まるだけ仰そし
くみせかけれのでおや〳〵又戰爭が始き
つたのだと最初は讀者がまいれとりふ程
で有つた。[redacted]角[redacted]讀物でふく実
地の日本で行はれた探檢の報告としては最日
[redacted]い私の一ツふつで有つた。
『黄金』は引續き『海の秘密』とりふ冒險

探偵海事小説を連載する事に成り。『新小[redacted]
[redacted]説』へは『[redacted]島守』（三月一日一氣に三十
枚脱稿）『文藝倶樂部』へは『新潮東曲』（三
月二十五日起稿四月二十四日脱稿百七十六枚半）
[redacted]せん。
これだけ自分は稼いだけれど眉山はいれ
ぢゃ原稿紙を引裂いては破て捨てるばか
りで有つた。
行李の紐れを小冊は持ちんで
自分獨で内願り[redacted]柿しい好きふ事る繋いで
書くと三[redacted]貴所で
帰て来れ時

乙

家の中では寂が敲とりふので

すは原稿紙を机の上で開りてゐる

眉山は全く天才肌の詩人ぶりで有る。無駄を思ざる

又紙上ケ原へ紙を持て行く事も度々で有る。

ある日光の上で午睡をして原稿紙を枕にして

寝るだけの事で有る。

昼顔や乞食の夢を這ひ掛る

彼の この句の想は成程陰々曇る日に成る

陰々曇る日に成る

ふく成る れの で 自分の 交い 衣類を 分けて

著せん。どちらも背丈が高いので それ は

26見

都合が好く、思然とも同じ十文で間に合ふ

9で有る。

来るべき運命

明治三十年の夏の秋

新潮来曲 嬉遊 六月末に出る雑誌

で発表されて その評も悪くは無かる。

嶋守の評はめざす草 巻の

十九の 雲中語 (露伴 緑雨 学海 鴎

外 蘆村 紅葉 思軒 いづれも匿名で

6号

合評）

（前号）冒頭負。椿の森八千代の井戸の水汲のところ まことに仙境の趣きあり、繪まつしゝて見たいほどあり。島女の打つて醫師のもとへ来るところ、誠に無邪氣ふしくてよし。（其実双方大きな有邪氣かも知れず。）蕗の可愛らしさ、我輩といへども蕗を切つて味のよさふつてしまふべし。近日は作者のもとを訪れてこんぶ島が眞個あるか聞て見れし

6号

と思ふほどあり（この文露伴か？）分知り。僕はもつと作者について嬉しく事がある。去は主人公高瀬文三郎の世話をよくする先生の名が石川久方といふ事あり（註曰く、小石川久堅町、即ち杉浦先生）作者は篇中の人物ともつゝも同感あるとより其恩師の名を新くつけたは僕はまことに嬉しく、作者の心があるかぶる嬉しく、作者の心があるかぶるのだ。僕は類りる嬉しく。（この文皆主か？）

号6

そのかた「新潮素曲」は、同じく「めざまし草」巻の十九の「雲中語」で、（前号）「饒舌」。身投を助けたのが故の情夫であったんだとは、ハッキリ新しくいうのです。

潮来婦志を書いた三馬の筆は、蓋し地下で名を養いてみやせう。

最負。犬の角をおく骨を折って書いたものさ。これもふびんされたとは申しませんで。

又「国民之友」第三百五十四號は浩々歌閣

28見

号6

が六號、二百半五版餘を費して精評して。

近日の小説中比較的佳作として多少の賞讃る値ひし、着想結構の略相似たるものを柳浪の「あにき」と抱月の「玉かづら」とする。（中略）之と雁行して着想結構相劣らず、しかも生面を開くものあるを、江見水蔭の「新潮素曲」とす。（中略）

要するに世美着想結構の生面あるを以て、吾人は第一に推るところ頗る多し。曾て「女房殺し」に於て無教育なる一女性を写し

て成功せる作者は、小説を通して
また成功する近しとふべし。近日の諸作
概ね悲壮を描く代筆則ち悲壮ならんとせ
る事情が自義の熱力より安慰の境に移移
して結晶する神韻あり、是吾人の生面なり
とする所なり。水隠若しなほ努めて止ま
ずんば、更に成功する境土を拓くを得べ
し。（下略）

□新小説□に考ふる目的で時代小説□鎧流し□
を五月九日から六月十九日まで掲載して百枚書いた。
（十月号に登載）□右隅□に当て□青国奴の見出を六月
二十七日から三日間で六十枚書いて出す筈だった。

見

当然来るべき運命が自分不相應な
食客を引受け□て□番酒を頼んだので
一盃の諸掛りを行詰って
来た。□中央□に連載した
それで□新鎌倉奴坊□を大阪の吉岡書店
で出版した関係から、同店へ前借を申込む
筆敵で自分は大阪を飛び、日本橋北詰の横町
に上野山蘆葉と言ふ俳神清宗で俳句をやる
男の所を頼って行った。（紅葉の紹介で一度江
の島見物に来た事のある男。その頃は丁度時
分大阪相撲の元老で本場所番附は勧進元の

に大きく名を出されてゐた。妻が全然失敗に終つたので、其頃帰坂してゐた浅田一舟の親父から、少しばかり借りたが、辛うじて帰村した。

然ういふ有様で、此儘で進んだら、どんな事に成るか分らないと、いよいよ大改革を行ふ事にして、七月に入つて川上眉山に退去を懇願つた。

眉山は亦諒解して辞去する事にして帰られた。

それから伊藤望蜀も、東京へ出て自立して居れるやうに言ひ附けた。竹貫、広瀬は其所に自分から去つてゐた——大澤は原稿のルビ振りに必用で、殘は食料を補ふのみか、愚妻も老母に借金までしてゐるので、二人だけは留めて置いた。稲岡、梁山も、悲劇で結末をつけたので有つた。

紅葉の再遊

明治三十年の冬

号 6

八月二十四日の唯一日で『燈籠岩』二十六枚を脱稿して『国文之友』の夏期附録に送り。『桜島探検記』を九月十一日から十六日まで掛つて六十枚脱稿。『少年世界』へと送つた。

『護摩』は『しらぬひ』を連載するつもりで準備を掛つた。（後は『海賊の恋』と改題）それに続て紅葉もの一篇の如き手紙が来た。

お手紙拝見仕候下難有存候扨十日過ぎ迄では出嵯峨むつかしくと存候（註曰く、紅葉[redacted]）先頃は十五日頃より書作掲載仕都合よろしく申出ありしに（註

号 6

[redacted]）十日頃より掲載相成度その節用意今より頼入候

例の『健筆』の一條何分とも宜敷御上京出嵯の前々日通知の件も大のみこみ六人前の部屋は大安堵（註旅館）柏屋より借入れ[redacted]（註）夫迄は刻目して待つところ（中略）今度は社の方の受よろしきやう精々勉め被下度今度又尾崎も休もゝふおめもいゝめ（註傍点原文通り）（以下同じ）といふやうふ所考が出る時は少々面倒の

号6

事は相成可申候間貴兄の事は関係する迄
なれいが中に入れ因果で拙が弱る事だ
ふけゆき式辺は君のゆれかふる様に訴ふ
る計無之拙も酔興の世話好みふ出れ身の
請ゆきよしない苦労をする日大概は諦め
候へどもなるべくは諦めぬる場合もあ
れば拙の位置及び胸中情察し被下度これ
だけ頼んでおのふふりければそれ迄の事へ
めて言はるぬ胸の中で人の中に立てば
目を立れぬ業のすゆる事するもすれば

号6

江兄 ↓ 僕 ↑ 社　上圖の式とくと御覧
被下度（郵便消印、明治三十年十一月
四日）

三字アキ

これでもう8日分が如何する社の方を不評判
で有るかと想はれるので、紅葉を一方ならぬ
迷惑を掛けれ事は、年経るつれて養
えふいのである。

この頃、鏡獅子の凝てみれ紅葉は、鼓丘を
喪ひて、終列車で雲然垂こんびまれ。同伴者
は中村花痩氏なり。雪後、畫家小峯苔石門下の

見張

索明

春葉くふ顔觸で有ふん。

明くる朝早く鶴ヶ寺の裏山ヘ分入って、我
々は皆勢子する迄ふが、大失敗で何んする拳
て ちかふん。そんで[redacted]の鳴や千鳥ふど狙ふん
が、これすふも失敗で有ふん。紅葉は[redacted]情氣
切って、ちょうど片腕ッ端の枝芦の間ふ進を追はさふたり。
ふて、孫上ケ原で執ふて[redacted]掲げさふて、て
れふも狙撃しふが、強ど百発百不中で有ふん。
何んでも淀るわりゃ下手ふのが紅葉の特色で有ふん。
何んでも

（つづく）